

## 【引退の辞】

～ ‘明るさ’ を求めて：無明をたゆたう我が心の始末記～

山上 千鶴子

私は、今年(2021年)11月末日で引退する。ここ東京・原宿を立ち退いて、滋賀県大津市におの浜へ移転することが予定されている。ここ原宿での四十年余の個人開業(private practice)に終止符を打つわけだが、振り返ってその歳月が何であったのか、私は一体どういう私になろうとしていたのか、ここで改めてその歩みを辿らうと思う。

タヴィストック留学を終えて1979年秋にロンドンから帰国し、私は翌年二月に個人開業を始めるべくここ原宿に居を構えた。彼の地を去ってから、私はもう決して後を振り返らなかつた。記憶は封印された。勿論のこと、彼の地で見たもの、彼の地に残してきた‘美しいものたち’には愛着があった。羊が群れる美しい田園風景を眺めながら、電車でゴトゴト揺られて訪れたロンドン郊外のアルドル城。夏の休暇を過ごした湖水地方の景観。クラシック音楽の演奏会に足繁く通った、テヌズ河畔のロイヤル・アルバート・ホール。四季折々の花が咲き誇るリージェント・パークは、私の散歩道で憩いの場。彼の地で訪れた博物館そして美術館の数々、取り分けてテート・ギャラリーが私の大のお気に入り。そこで見た龐大なモダン・アートの絵画作品には大いに刺激を受けた。それらすべてを私は堪能し、いのちの糧ともした。だが、帰国後、心を占めていたのは、何としてでもこの日本という地に足を着けて生きてゆかねばならぬということであり、私は此の地で自分一人寂しくならない自信を得た。そこで‘美しいもの探し’が始まった。彼の地での思い出に勝る‘美しいものたち’を新たに此の地で探そうとしたのだ。それで手っ取り早く美術館巡りが始まった。出光美術館、山種美術館、根津美術館などなど。他にも画廊巡りも積極的で、銀座の画廊を軒並み覗いて回った。美しいものがいっぱいあった。彼の地の人々にどれほど恩義があろうと、私は彼の地には決して属していなかつたわけで、彼らに対して生涯私が負い目やら引け目を覚めるなど断じて許せない。自分の祖国であるわが日本、そしてわが同胞を誇れるということ、まずはそれが肝腎なのだった。

それから間もなく、東京中あちこち能楽堂を訪れ、能舞台に親しんだ。取り分けて目黒の「喜多能楽堂」がお気に入り、足繁く通った。おそらく自らのルーツへの回帰ということであつたらう。此の日本に自らを繋ぎとめる何かを私は探していた。精神分析家としての私が真に此の地に根づいてゆくために新たな‘因縁’が希求されたのだ。その当時、喜多能楽堂は、宗家の十六世喜多六平太はご存命でいらして、舞台ではよく後見をつとめていらしたし、シテ方の喜多節世、友枝喜久男、粟田菊生など、そしてワキ方の森茂好、宝生閑など錚々たる顔触れで賑わっていた。喜多流は質実剛健さの気風があり、その舞台は気魄が漲り、かつたおやかさが漂っていた。演目の如何に関わらず、私はただ舞台を前に座っているだけで、異国での孤絶ゆえに渴き切った心がまさに潤されてゆくようだった。ピーと劈くような能管の音、それに呼応してポンポンやらカーンと拍子を取って響く鼓、大鼓そして

太鼓。時折のヨッ、ヨッ、イヤーといった掛け声。それら囃子方の奏でるリズムの心地よかったこと。地謡の波のうねりの如き旋律に押し上げられるかのように、シテ方がひたすら嫋々と舞う。それらが相俟って、眼前に繰り広げられる幽玄の美なるもの、その縹渺とした余情に私は陶醉した。周囲を見遣ると、‘美しい日本人たち’が居た。その中に私も又居た。もはや異邦人ではない。深い安堵を覚えた。

やがて、お能の舞台そのものの内的構造が精神分析の場に似通っていることに思い至った。とりわけて世阿弥の夢幻能だが、ここで舞台のワキ座に着座したまま身じろぎもせず控えるワキ方に注目した。そのワキ方の姿に、分析家としての己自身が重なる思いがしたのだ。そもそも夢幻能とは、ワキ方の‘夢見’の体験が舞台化されたものという。それは概してこんな筋になる。諸国一見の旅僧なるものがいわれのある土地を訪れるところから始まる。ワキ(旅僧)が、その土地の故事に因む霊たちの供養にひたすら甲いの読経を唱えてる。そのうちやがて夢幻の闇、瞑暗の世界から忽然とシテ(死霊)が現れる。それら死霊は自ら抱えもつ妄執にとり憑かれている。なんとしてもそれを晴らしたい。それがために誰かに訴えたいという思いがある。僧はそれに招き寄せられたというわけだ。僧がくはしく御物語候へ>と促す。その呼びかけに応じて、死霊は昔語りを始める。やがて感極まって舞いだす。こうして呼びかけがあり応答があり、両者は相対し、ワキはシテの昔語り(回想)に聞き入る。折々に合いの手を打ち、手向けのことばを返す。妄執の苦悩に身悶えするシテの纏れた思いを解きほぐす。その寂寥感、やる瀬無さを掬い取る。〔例; 謡曲「井筒」、「松風」、「檜垣」、「求塚」、「采女」、「姨捨」〕時には物狂おしい執念の鬼と化した異形の姿に必死に立ち向かう。手にする数珠をさらさらと押し揉んで、法力を尽くして祈り伏せんとし、さらには脱悟させんとして…。〔例; 謡曲「葵上」、「鉄輪」、「安達ヶ原」〕やがて、仏(法)との結縁を得て、妄執が晴らされ、成仏を遂げ、シテ(死霊)は舞台から消えてゆく。そして、旅の僧も夢から醒め、さらなる旅路へと立ち去ってゆくというもの。ここで注目すべきは、シテ(死霊)の内包する‘心の傷み’を凝視するワキ(旅僧)のまなざしである。なにやらピオンの言うところの‘コンテインメント’、さらには‘夢想(reverie)’がここで想起されはしないだろうか。抱えること、贖うこと、その点で実に精神分析に繋がっている。そもそも夢幻能の骨子とは、妄執に縛られかつ囚われていた亡魂が浄化され、そして蘇るということ。すなわち、いのちが贖われるということにある。ここでクライン派分析家の一人として私がつくづく思うのは、フロイトのいうところの死の本能、それに拮抗せんとして抗う生の本能、それらの相克から断固としてわれわれは目を逸らしてはならないということ。

そもそも遡れば、能とは、大陸から渡来の「祈祷芸」に列なるものといえる。つまりは鎮魂呪術。人々の平安を言祝ぐこと、そして(災厄・穢れなどを)祓うこと。それらは、芸能一般の普遍的原理であり、この点において究極に人間が求めるものには東西の違いはなかろうかと思われる。ところで興味深いことに、わが国の中世、世阿弥によって集大成された舞台芸術の能楽、特に夢幻能のシテには‘近代的自我’が窺われる。登場する死霊は、飽くまでも一人称でかき口説く。〈何故にわたしは斯くも苦しむのか〉と…。そして〈わが妄執を晴らし給へ…わが亡き跡を弔ひ給へ…〉と訴える。だが、その‘痛ましや・恥ずかしや’の我なるものに執してやまない。そうした彷徨う魂が、かつてこの世に生きたことの証となるような出来事に尚も綿々と愛惜し続け、その追憶を語らずにはいられない。そうした

願望を熾烈にもち続け、それが聞かれるためにこそ誰かしら相手を希求してやまない。<いかなる人にてましますぞ。御名を名乗り候へ・・>と呼びかけてくれる声を、そして<御物語候へ・・>との促しを。一瞬なりとも誰かのまなざしにその姿が留められ、その想いのうちに抱かれること。お能の場合には、それは鎮魂であり、つまりは‘仏(法)との結縁’を得て成仏するといったことになるわけだが・・。それでシテ(死霊)は縷縷回想にふけるわけなのだ。だが、それで一旦は気が晴れたかに見えるにしろ、それで舞台から去ったとしても、どうやらそれだけでは事は済まないように思われる。またまた戻ってきそうな・・！死霊にはまだ語り尽くされてはいないという思いが残ってはいないかしら。まだまだ<わたしは・・>と語りたい、そして<あなたは・・>と呼びかけられていたい。この執拗な自我意識、つまり‘私’という唯一無二の自意識を持って生きているのだ。「私とは何ものであるのか」という自我の自覚化。それ故の果てしなき苦悶の声。それらは実に、語られねばならない、聞かれねばならないのである。自我はなによりも己の‘内面の真実’を拗りどころにする。世阿弥の能楽は、やがて「猿楽」本来の亡霊供養や鎮魂儀礼、そして神仏への帰依を促す勸進聖の上演した唱導劇などからも大きく遥かに逸脱してゆく。民衆の教化とか善導すらもかなぐり捨ててしまう。世阿弥は‘自我の实在’を自明とする‘近代人’なのである。そして彼の作った能のシテ(死霊)は彼の分身であるが故に、当然ながら近代的自我が付与されているというわけだ。彼は<命には終あり。能には果あるべからず>とおっしゃってる(「花鏡」)。そう言えば、フロイトにも「終わりなき(精神)分析」という言葉があったはず。似ている！いずれにしても、このように‘語られねばならない、聞かれねばならない私’というものこそが核心部分であり、それを擁護するものこそが、現代的なバージョンとして、「精神分析の未来」と考えられなくもない。そのように私は感じ取った。ここから、<人は誰しも、自らを証しせんとするものである>というのが私の持論となった。ワキ方がそうであるように、われわれ分析家とは‘証しびと’なのだ。能舞台にも似て、分析セッションの場とは、その本来において分析患者が‘わたしがわたしであることを証する・証される場’であるということ。この感覚が分析家としての自分のなかに根づいてゆくこと、それが此の国に分析家としての自分が根づいてゆくことなのだ、と私のうちで祈念されたことになろう。私は、能舞台と心理臨床の場を歩きつ戻りつしながら、そんなことを考えていたように思う。

唯一つ、どうしてもここで私の心が躓くのは、精神分析は宗教を持たないということ。‘神’が居ない、‘仏’も居ないということ。だとすれば、蒙昧なる心の救いは究極に何を拗りどころにすることができるのか。一体何にすがればいいのか。分析の場とは一体何が託されているのかということ。所詮ことばしかない。つまりはロゴス。しかも筋(ミュートス)だ。それこそが命綱なのだ。それを手繰りながら、いつしか<あっ、そうか！>と‘わたしなるもの’が自覚に繋がる。それを待つことしかない・・と。自己覚醒が他者救済につながる。自己の目覚め(覚醒)の機縁となるべく、ことばが働くということ。それが他者救済(いのちの贖い)につながるやもしれない。まずはロゴスの働き、ロゴスが心のうちに蟠る情念をどれほど揺り動かし、死(沈黙)から生(ことば)を蘇らせることが出来るかということ。つまりは、いのちが‘声’をもつということであり、それは語られねばならないのだし、聞かれねばならないのだ。そこにこそ、分析家としての私の信(faith)があったといえる。

こうした背景から一つのフレーズが思い浮かんだ。<こころの言葉、‘個’<sup>うた</sup>を謳<sup>しず</sup>う>というものであった。お能『二人静』の中で白拍子・静御前が義経を偲んで謳う<賤や賤賤の苧環繰返し昔を今になすよしもがな>なのだ。そこにはまるで糸繰り車(おだまき)をぐるぐると巻き戻しながら、昔を語りそして今を思う。その分析患者の語る回想で浮かび上がる情念、無意識の底に沈潜してしまったそれが意識上に引き上げられる。そこに紛れもない‘わたし’というもの、掛け値なしの‘個として私’が捉えられた。そこにこそ精神分析の眼目があると…。或るときNTTの職業別電話帳にぜひ広告をとの勧誘があった。「ヤマガミ精神分析クリニック」の宣伝である。それで「精神分析」の下にこのキャッチフレーズを掲げたわけだが、私の姉がそれを目にして、すぐさまこれって、全然解んないよ…>と言った。つまりは、意味不明だよというわけ…。私はそれには全然動じず、<ウン、それでいいのよ…>と返事した。案の定、広告へのレスポンスなぞ皆無であったが、私は平気なのだ。まるで頓着しない。誰にも解らなくてもいい、自分にとってはそれこそが精神分析なのだからと悪びれない。この掲げられた‘御旗’は、誰のものでもない、私のためのものであったのだから…。或る意味それは‘願掛け’でもあったわけで。ここが実に私らしい。‘夢見る夢子さん’の私は、‘盲蛇に怖じず’と言われてしまいそう…。

私はいつ頃からか自分が一つの‘才能’だと思えるようになった。だが、実際のところそもそも私など生来が斑<sup>むら</sup>気なところがあり、雑駁な知識しか持ち合わせがないし、帰国後まったくの‘今浦島さん’みたいで、世間の情報にもひどく疎い。たとえ何かしら才能があるとしても、勿論潜在的なものでしかないわけで、これから自らが育ててゆくものであり、それこそ運がよければごく自然に自証されてゆくものだろう。西田幾多郎の著作に時折見かける「自発自転」という言葉が好きだ。自然に任せるしかないということ。それでも経験的に解っていたことは、運がいいというべきか、故知らずいつも必要なものを必要な時に手にしてきたということがある。それが事実だとしたら、いつか‘才能’が結実することだってあり得なくも無いとの楽観があった。無いと思うよりは、有ると思っていることで、何かが始まる。しかしながら、何と云っても精神分析なのだ。それも日本での…。どんな夢を見たものやら…と危ぶんだ。実際のところ、<ああ、自信ない…自信ない…>の嘆きの言葉が心の内奥で反芻して止まなかった。日々の臨床も、ただただ‘おっかなびっくり’といった感じで、取り敢えずはそんなところが無難だろうと思い定めてもいた。こうした‘おっかなびっくりの及び腰’、それからもう一つ、‘自分は一つの才能だ’といった妙なわけのわからぬ矜持の狭間で私の心は揺れていた。

そんな折、或る一人の異性との出逢いがあった。私に向かって事ある毎に<あなたは、ナ～ニモ知らないんだねえ>とさも嬉しそうに言う人だった。それには返す言葉もない。事実私はそのとおりだったのだから…。さらには、<(マラソンレースに喩えれば、あなたというひとは)一周遅れで先頭を走ってる(ランナー)みたいだねえ…>と、私を揶揄もした。この方は、或る意味日本のみならず海外に於ける精神分析事情に幾らか通じた人でもあったから、私は、なかなかそれも言い得て妙なりと感心したものだ。内心ちょっと可笑しかった。決してそれは的外れではない。‘フロント・ランナー’などとてもない。一周遅れどころか三周遅れと言ってもいいような…と正直そう思った。だが、全然励まされることも慰められることもないわけだから、勿論私の気持ちは大いに凹んだ。確かに、私がクライン派としてナンボ

かのものであろうと、もはや時代はポストクライム派が優勢になろうとしていた。わが国でも私の後輩になるタヴィストック帰りの優秀な若手の分析家たちが続々台頭してきている。だから、私などは後方に取り残されていてもおかしくはない。おそらくまったくもってそうであろう。しかしながらこの話を聞いて、旧知の画家のヒデさんが、＜真理を探究するのに後も先もないだろ・・・＞と言い切った。それで凹んでいた私も幾分背筋をシャンとしたのだったが・・・。

幼少時から私はどうにも人前で自分の意思を表明するのが苦手な性格だった。亡き母親は私に＜チズコは内気だから・・・＞と言った。姉も私を＜ちよっとおぼこいところがあるわよね・・・＞と。〔‘おぼこい’とは東北弁で世間知らずで純情なこと、つまり子どもというわけ。〕そんな私だったから、つまり喧嘩ができないということが致命的なのだった。＜なめんなよ・・・！＞とでも一喝できたらよかったのに・・・。どうにもそれは所詮無理なのだった。気が優しいというか、妙にフニヤとして尻込みしてしまう。だが、一方で愛執に絡めとられてか、私は身動きが付かない状態になっていった。何かひどくチグハグで噛み合わない。自分の立ち位置が怪しくなった。悲しくも滑稽な成り行きになっていった。心の痛みはきりきりと揉み込んでからだを侵した。憔悴し、整体治療に通い始めたものの、鬱々とした日々は続いた。そんな折に母親が上京してきて、二人で軽井沢へ旅行した。母親は何も事情を尋ねなかったが、母特有の直観で私の身に起きている異変を察知した。それで、ふいとチズコは変だよ。明るくなくてダメ・・・。患者さんのためにもね・・・＞と私に言った。ハッと胸を衝かれた。「明るくない私」、そんなものはついぞ知らなかった。それで思い出すのだが、かつて原宿駅との間に「生長の家本部」の建物があり、そのお隣に小さな自然食品を商うお店があった。その奥さんがよく私に言った。＜あなたが店に入ってくると、店の中がパーと明るくなるわ＞って・・・。とても喜んでくださって、時折『健康』の小冊子を手渡して下さったり・・・。決して格別そこで愛想のいい顔をしたはずもなかったのに・・・。実はそうしたこともそこだけの話ではなく、他でも同じことを言われたことがあった。とても不思議だった。だが、もはやすっかりその面影はない。今やすっぱり憂いに覆われてしまっていた。だが、俄然眼が覚めた。そうだ、その通りだと母親の言葉で私は立ち直った。それで、この恋はダメだと観念し、思い切った。惜しいかな、この方は今ではもうまったくの‘ストレンジャー（見知らぬ人）’になってしまっているわけだが・・・。

ここに、その頃に私が見た、或る一つの「夢」が蘇る。《夢；鳥籠の中にカナリアが1羽いた。その籠はガスコンロの上に置かれてある。籠の中からカナリアが出たようだ。それから部屋の中を飛び回っていた。可愛い。それから間もなく、どうやらカナリアは籠の中へ戻ったらしい。しばらくしてふと見ると、ガスコンロの炎がオン(ON)になっていた！籠の中の鳥の羽根が焦げて、どうやらくろずんでいるのに気づく。死んではいけないらしいが、見る影もない。とても人に見せられないな、と一瞬思う。慌ててガス栓を止め、オフ(OFF)にする。籠の中にもう1羽、もしくは籠の外にもう1羽、つまりカナリアは2羽いたようだが、判然としない・・・。》目覚めて、思わずギャー！の悲鳴が漏れ聞えた。これぞ煩惱の炎の燃えさかる‘火宅’ではないか。愛執の虜となり、そこから逃れることもままならず、むしろ懲りずに舞い戻ってしまう、救われ難い己自身の姿がそこにあった！ここで謡曲『定家』の物語が髣髴とする。定家卿の恋慕の妄執に取り衝かれた式子内親王が、死後も‘定家葛’と呼ばれる蔦にびっしりと覆われた墓の

中で尚もその苦患を深めている。その式子内親王の死霊が現れて、僧の経の読誦によってその呪縛からいつとき解放される。そして報謝の舞を舞うのである。だが、いつしか墓へと再び舞い戻り、姿を消してしまう。墓はまたもや蔦葛にすっぽりと這いまとわれる。元の木阿弥というわけ・・・。愛執とはかくも懲りないもの。たとえ業火で我が身を滅ぼさんとしても・・・。誠に<あな愧ずかしや・・・>である。

あの当時、私は内心怯えていた。自分が「高村智恵子」みたいになることを・・・。夫である彫刻家・高村光太郎への恋慕に憑かれて、だが無念にも油絵の才能は開花せず、身内の度重なる不幸やら不祥事に翻弄されたこともあって疲弊し、自立する活路も見出せず、ついには自滅した哀れな魂。<わたしはわたしに生きる・・・>はずではなかったのか。彼女に一体どんな誤算があったというのか。狂うことによってしか、自己の主体のありかを示し得ない。それで狂わなければ、自分の表現意欲に従うことができないといったことなのか。彼女の遺品、それらの切絵作品。己が何事かを為し遂げねばならぬとの彼女の思いは、それで成就したともいえよう。だが、やはり‘近代的自我’の芽生えに支払われた、その代償がひどく痛ましい。愛する男に隷属し、愛するがゆえに自己規制する。それも、その犠牲を犠牲とも思わず、喜んでやって悔いない。そうした私の母親そしてその前の世代の女たちに対して些か反逆心がなかったはずもないのに・・・。己の才能を信じ、その開花のために人生を賭けるといったこと。それが許される時代を私たち日本の女性が求めてゆくこと。私の場合、精神分析がそのための‘つかい棒’になるはずではなかったのか。それが今更にして、まるで‘萎れた花’のように私になるなど断じて許されるものではない。言うなれば「主体的な自己覚醒」、それが私の精神分析の眼目ではなかったのか。不甲斐ない！と己を叱咤した。不甲斐ないだけで終わるわけにはゆかなかった。事実分析患者たちは集まってきていたわけで、私の主催するセミナーにも・・・。小此木啓吾先生を初めとして、ご紹介をいただきお越しになられた若手の専門職の方々もそうだが、エッセイスト木村治美氏が著した『こころの時代に－私の精神分析入門』（1983；文藝春秋）にかつてロンドンで邂逅した私のことを書いてくださったお蔭で、幾らかそれが関心を引いたのか、徐々に一般の方々も集まってくるようになっていた。彼女から<潜在的には精神分析を受けたいという方は結構いるのよ・・・>と聞かされていたが、私は半信半疑だった。<精神分析など用のある人には用があるけど、用のない人にはまるで用のないもの>というのが正直なところ私の持論だったから・・・。おっかなびつくりながらも、とにかく「無理しない・無理させない」を鉄則にどなたにもお付き合いしていただいた。

何よりも心身の健全さが求められた。私は自らの建て直しを図った。カメラを趣味にしたことで、出掛けることが多くなった。花たちは勿論、祭りやら石仏やら、ごく自然に‘写欲’を覚える被写体を追っかけ始めたわけで。出不精のはずの私があっちこちと飛び回っていた。隅田川花火大会そして佃島の盆踊り、箱根仙石原の諏訪神社の湯立て獅子舞、甲府の天津司の舞い、それからほるぼる遠征して信州の修那羅峠の石仏群を訪れたり・・・。それで俄然‘一人家族’の自信が生まれた。それに勢いづいて、積極的に‘群’にも参加し始めた。信州安曇野の道祖神祀りやら遠山の霜月祭りの体験ツアーだったり・・・。或るきっかけで「野田地方史懇話会」にも入会した。ご縁は今でも続いている。史跡探訪、特に石仏巡りだが、他の会員の皆さま方とご一緒に千葉近辺をよく散策した。さらには、

『日本野鳥の会』の会員登録したことで、急激に活動範囲が広がった。双眼鏡を手に、多くの先輩格のお兄さんお姉さんらに引き連れられて、賑やかに野山を駆け回った。奥多摩、高尾、双子山…。それから、三番瀬やら谷津干潟にも…。‘群の中の一人’であることが全然怖くなかった。むしろ嬉しかった。お蔭で足腰が鍛えられただけではなく、もはや人見知りせず、いつでもどこに居ても誰かと一緒に何事かを喜べる自分になっていた。それに味を占めて、もう一つ。銀座の教文館で催された「ヘブライ語教室(ウルパン)」にも通った。いつか旧約聖書の原典講読をしたかったからだが…。仲間に混じって学習する、屈託の無い、大きな笑顔の私がいいた。それはどれほどの安堵であったことか。

この折に母親から‘助けてもらった’ことに生涯私は深い恩義を感じている。その晩年母親は認知症を患ったのだが、その十年間グループホームへ遠距離介護に月1回通い続けたのも、その恩義に報いる思いがあったからなのだ。どんなに痴呆化が進もうと、あの折の<チズゴは明るくなくてはダメなのよ>と、私を諭した母が私の母だった。それにもう一つ、忘れ難いことがある。いつか私は母に打ち明けた。<自分はずうと恵まれてきた。全其人並みの苦勞というのをしていない。姉やら妹と比較してもそうで、だからそれでどうも自分はダメだと思っちゃうのね。>と。その折、<否、チズゴは誰もしていない苦勞をしている。>と言い返し、私を慰めた。びっくりした。そうか、そうなのかと、じゃあ世間を知らないなどと妙な劣等感を持つこともないのかと…。またまた母に助けられたわけで…。

ここで或る一人のなつかしい人が思い浮かぶ。語ってみよう。太田久紀(おおた・きゅうき)先生とおっしゃる唯識仏教学者である。私はこの方に『朝日カルチャーセンター』(新宿)に於いて「能に見る仏教思想」という講座の受講生として出会った。1996年～1997年の間のことだ。太田先生は、配布された参考資料の謡曲の詞章を見ながら、ただ淡々とそれら背景にうかがわれる仏教思想について講釈なされた。興奮するとか声を荒げるなど思いも寄らない、謹厳実直そのもののお人柄のようであった。どちらかという地味で学究肌というか、受講生との交わりといったものも格別何もない。だから物足りないということでもなかったけれども、まるで墨絵のような印象で、どうしても印象は薄い。太田先生の講義には、「わたしも」「あなた」もない。ただひたすら「われわれ(衆生)」がいるのみであった。彼の著作の一つに『凡夫が凡夫に呼びかける 唯識』(1985)というのがあるが、まさに「われら凡夫」のみであった。どこかで彼自らを「凡愚の私」というふうに語っておいでだったが、確かにそれ。講義中も、ひたすらそれに徹して「法語」に向かい合っただけで尚もご自分が学ばんとしているといった趣きなのだ。受講生に対しては‘唯識の善き導き手’たらんとし、それ以上の野心のかけらもないといったふうに…。また、自分でもまだ解ってもいない境地を証得したかのように振舞うこと、それを‘増上慢’というらしいが、どうやらそれを自戒なさってらしたみたいでもある。学識をひけらかすようなことなど皆無であったわけで…。因みに、唯識に「依法不依人」というのがあるらしい。つまりは「人に依らずして法に依れ」といったことらしいが、まさに彼の場合それなのだ。飽くまでも法(仏教思想)を語られることに専心なされて、己自身は完全に消してしまわれておいでのようだった。またそこに個人的な懊惱などであろうなどおおよそ考えられもしないといったふうであった。ところが、である。ある時、ふとそんな彼に思いも寄らない‘亀裂’を覗き見る思いをしたことがあった。「無明」という概念を解説されていて、確かその絡みでだったと思われる。

つまり無明とはものの道理(真実)を理解しない、人の心のあるべき姿をみることができない、すなわち深い心の底にある暗さ・愚かさであるということ。だから、<‘明るくない’ってということは、問題になる・・・>とポツリとおっしゃった。その何気ない風におっしゃった言葉が私の胸をグサッと貫いた。まるで我が身を引き裂くように閃いたのである。実に鮮烈だった。確かに私がそうだ！でも、それって、精神分析の‘盲点’ではないのか！と・・・その時、ふと彼という人間に俄然興味を覚えた。もしかしたら、太田先生ご自身が‘明るくない’ご自分を嘆くお気持ちが幾らかおありなのかしらって。よく言われる大悟とか信心決定とか、つまりは道理への爽やかな聡明さとも違う別の何かだ。どうにも自分の心が根底的にスカッと吹っ切れていないといった気づきを吐露なさっておいでなのではないか。私はなんだか‘自分に似ている人’がここにいるといった感じを抱いたのだ。そのときは、ただぼんやりとそう思っただけで、敢えてそれ以上踏み込んで知ろうとはしなかった。太田久紀先生とはそれだけのご縁で終わった。唯識については、いつかはもしかしたら精神分析に繋がるといった直観だけは残ったが。まだ当時は、その精緻な学問体系に怯む気持ちがあり、尻込みしてしまった。とにかく今ではないといったこと。だから、あの折に頂戴した講義資料はずうと倉庫で眠ったまま。ところがつい最近引っ張り出してみたら、メモ書きに赤ペンで結構克明に太田先生の語られた言葉が書き記されている。そこに、確かに<‘明るくない’ってということは仏教では大事な意味を持ってくる・・・>とあった！だが、それは1回限りで後にも先にも見当たらない。それどころか、入手した彼の他の著作『仏教の深層心理—迷いより悟りへ・唯識への招待』(1973)そして『唯識の心と禅』(1999)を一通り読んでみたのだが、その‘明るくない’云々の言葉はどこにも見つからなかった。だが、やはり思った。唯識を学ぶということとは<‘明るくない’ってということは問題になる>ということに気づくことだと彼が語っているということ・・・改めて、この人がやはり自分に似ていると思った。生来内気で目立つのが厭といったふうな・・・内心自分を‘愚図’だと思っていた節がある。だからこそ‘誰かの子ども’でありたいと願う想いが人一倍強い。であるからなのか、実に心あたたまる師たちとの交流があったわけで・・・。沢木興道、大西良慶和上、高田高胤和上など・・・。生来不器用な彼がただ愚直にこの一筋の道に魅せられて、つまり彼の場合は「唯識」だが、それで今に至ったということ。私の場合は精神分析だが・・・。彼は自分に似ている誰か、それももしかしたら自分に一番似ている人なのかも知れない。しみじみとそんな感慨が湧いた。そのように今頃にして、記憶の遠い彼方から「太田久紀」という存在が迫り上がってきて、私の心を大いに慰めた。

実は、ロンドン滞在中の話だが、己自身の心の内奥の‘闇’を覗いたような忘れ難い記憶、眼に焼きついている或る一つの光景がある。タヴィストックでのトレーニングも中盤に差し掛かった頃かと思われる。あの当時、彼の地で私は一体どういう気分で生きていたのか。なにやら茫漠とした感じなのだが、異国での一人暮らしに些か心倦んでいたのかもしれない。その時、確か私はイヴニング・セミナーに行く途中だった。ベーカーストリートからバスに乗り、スイスコテッジのバス停で降りた。午後で夕暮が訪れようとしていた。薄靄がかかった光の中に学校帰りの子どもたちの影があちこちにぼんやりと浮かび上がる。まるで影絵のようだ。人影は生氣のない、一向に血の通わぬもの。まるで‘ゾンビ’のように、茫漠として浮遊していた。自分とはまったく繋がりのない、異次元の世界。それはまるで冥界といった感じで。私はただ呆然としてそれを眺めやっていた。もうすべてが‘見知らぬもの’としてあった。或る種



の‘離人感’であったろうか。一瞬立ち竦んだ。からだも心も固まった。冷え冷えとした感覚だった。私は、自分が誰に対してもはや温もりを覚えない、冷やかに心閉ざした人間になったのかと訝った。敢えて言えば、‘人間嫌い’。その頃には英語を喋ることに全然不自由になくなっていて、物怖じせず、バシッと押し出しもよく、確かにすごく逞しくなっていた。だが今憶うに、明らかに顔に‘表情’が消えていた！それは紛れもない事実。その懸念を或る日分析セッションの中で語った記憶が辛うじてある。それにどのような返答があったのか、まるで覚えはないのだが・・・この殺伐とした自分。不可解だった。ふと‘石女(うますめ)’という言葉が脳裏に過ぎた。‘孕むことのできない女’という差別用語であろうが、それこそがそのときの自分に適っていた。その懸念は、実に「表現者」としての私という意味合いで、つまりのところ‘言葉を孕む力’、それが希求されていたわけだが。自分は所詮ダメなのではないか、と深い疑念に取り憑かれてしまった。実に私は、この感覚を引き摺って帰国したのである。

帰国後、イギリスでのことはほとんど記憶の彼方へ追いやって生きてきたし、彼の地で私が見た歴大な量の夢も何ら顧みられることなしに過ごしてきた。ただ一つ或る印象深い夢の記録が残っている。《夢：葬式を控えてのお通夜らしい。人が集まっている気配。二階のベランダから下の通りを眺めている。そこに車椅子の誰か、障害児学級の子どもらが通り掛かる。ふと見ると傍らに陶器製のお鉢があった。その中には温かいご飯があって、ご飯に混じって、中に小さな白い卵が幾つかある。孵化しかけた鳥が、殻の中からその顔を覗かす。何故か片足取れた孵化したばかりの雛が一羽クニャとなって死んでいる。ビニールの袋の中に入れる。もう助からない。捨てるしかない。傍らにどける。もう一羽大丈夫なはずのがいたのだが、徐々に息がなくなる気配を感じる。それを抱きかかえんとするが、もう手遅れらしい。片付けなくてはならない・・・と焦る。》「後記」には、この夢の連想としてくどうやらこの時期読んでいた『カミーユ・クローデル』に関連しているかとは思うが、自分の中に極めて陰鬱なものを発見して驚愕する。この手の夢は、これ迄に何度か覚えがある。何故‘ご飯(米)’なのかという点は、たぶん‘糞’が文字通り米が異なったものという発想から来てるのだろう。つまりそこにはおぞましくも尚‘糞便’と‘赤子’との混同が根源的にある。そこには自分が見捨てた、見殺しにした、生かせなかった、そうした誰彼にまつわる悔恨が窺われる。生きることの凄惨かつ殺伐とした真実。慟哭する思いである。マティスの絵の中にあつた「金魚」のように、母親のからだについての万能感的蘇りを成就し、至福を甘受するのは対照的に・・・己の中に厳然としてある‘死の翳り’。それは私ではない、あつたまるかという反駁、でもそれも私かも知れないという内省。呵責の念に苦しめられる。いたたまれない、この思い。でも私は、生きてゆかねばならない。この存在の疚しさを内に抱えながらも・・・>と綴られてある。

実際のところ、かつて私は京都大学大学院当時「児童臨床」に行き詰まり、それを打開すべくイギリスへと跳んだ。「見るべきものを見るために・・・」だった。そして終わってみれば、その「見るべきもの」とは、実は自分の心の内なる深奥にあつたのだ。すなわち内面の真実。私こそが贖われなければならぬものとの気づきであった。そこから後年、「贖いの器」というのが私の精神分析の‘御旗(キャッチフレーズ)’になったというわけなのであるが・・・。それを見届けようと思った。自分の内面を凝視した。そして折々に‘気づき’を拾う。その手立ては毎日の「夢分析」でしかなかったのであるが・・・。

確かに帰国当時、私はクライン派として、或意味でパイオニアとして位置づけられ注目されてはいたが、どんな期待が寄せられようと、それとは別に、<ああ、私が問題なんだ・・・>という醒めた<sup>さ</sup>思いがあった。自分を‘油断ならぬ者’として眺めていた。自分が危ういのではといった思い・・・。心の内側を覗き込む。そこにどんな見るべきものがあるのか。あるとしたら、それは見なくてはなるまい。だから、そのために、夢分析に明け暮れた。自分の心のうちにさんざめく想い、その濁流に身を流され、呑み込まれそうになりながら、どっかにあるはずの自分の‘立脚地’を必死に探していた。言い換えれば、‘内なる芯棒’というか。日常のなかにしっかりと自分の現実を根付づかせ、足場を固めてゆく。もはや頼るべき誰もいない。自分だけ。そして、分析セッションのなかで分析家として分析患者と出会っている。その己自身だけが支えだった。自分の語る言葉、それが相手への呼びかけであると同時に、おそらくそれ以上に自分への呼びかけとしてあった。聞いてもらえてる自分がいてこそ、語れる。我が内側から紡ぎ出される己の言葉が、誰かの内で‘生きられないわたし’が‘生きられるわたし’へと転換する、そのきっかけ(機縁・媒介)を孕むものとなるかどうか。それだけが肝腎<sup>はら</sup>だったのだ。それは同時に、‘生きられない’がどう‘生きられる私’になるのかを模索していたわけだが・・・。かくしてそのようであったからこそ自分は生きられたという実感がある。よくぞ付き合ってください、そのように分析患者の皆さん方にありがとうと感謝の念を抱く。と同時に、些か<sup>ゆる</sup>赦しを請う気持ちがなくもない。<ごめんね>と詫びたい思いを内心抱いてしまう。付き合わせてしまったわね、だから<ごめんね (forgive me)・・・>ということだが・・・。

ここで、或る一つの小さなブロンズの彫刻作品について語ろう。ロンドンのどこの美術館で見たのだったか、もはや覚えてない。まったくくれんみのない、素朴な造形であった。腰掛けた一人の年寄りがいて、それに向かい合って膝まずく若い男。タイトルに確か「Pardon」とあった。‘赦し’である。なにやらふいと胸を衝かれた。が、そのまま通り過ぎた。私はロンドンで、そしてパリでも、絵画ばかりではなく彫刻の数多の作品を見て歩いたのだが、忘れ難く記憶に残った彫刻といえば唯一つ、これなのだ。帰国後もこの歳月ずうっと忘れずにあった。著名な彫刻家の作品であるはずはないと勝手に思い込んでいた。が、そんなはずもないのではと思い直し、ネット検索で探してみた。あった！ベルギーの彫刻家で「コンスタンタン・ムーニエ (Constantin Meunier)」であった。「The Pardon」というタイトルとは別に、もう一つ「The prodigal son」ともあった。なるほど、‘悔い改めた息子’、すなわち聖書物語の「放蕩息子」であったわけだ。何故にこれほどに私の胸を衝いたのか。それが不思議だ。ただ惟うに、われわれは尚も近代的自我つまり自我執着に取り憑かれている。なにも‘放蕩息子’に限らない。それを徹底させてゆけば、その先には間違いなく‘<sup>やま</sup>疚しさ’‘<sup>はびこ</sup>後ろ暗さ’が心の内に蔓延る。だから、近代的自我の超克には‘赦し (forgiveness)’はキーワードではなかろうか、と私は常日頃考えている。精神分析の未来に‘贖いの器への変革’という概念を打ち出したのも、根っこにはそれがある。

この‘赦し (forgive)’のこぼを夏目漱石の英詩に見つけた！瞠目した。彼がロンドンの地で書いた最初の英詩《Life's Dialogue》だが。詩全体は、2つのスピリット(霊)の対話形式になっていて結構長つたらしい。そして、なんと最後のフレーズに、「To sleep, to forget and forgive.」とある！これには心底驚いた！当時漱石のチューター (private tutor) だったクレイグ先生は、これを見

せられて、筋(論旨)がincoherent(支離滅裂)だが、幾らか詩人ウィリアム・ブレイクに似てるとかおっしゃったそう。確かに深遠にして神秘的な響きが漂う。だが和訳など到底不可能だ。それでも、その骨子は解らなくもない。＜此の世で己自身の因縁を結べ。それをとことん徹底して生きよ＞ということ。＜<sup>もつ</sup>纏れ纏れたとき、それを解くことがどれほど難儀だとしても、恐れるな。それが人生なのだから・・・＞と書いたこと。そして最期には、＜すべからく此の世のことは夢として、‘赦し’を胸深く抱きながら、心安らかに瞑目せよ＞と・・・どうやらそんなふうに彼は語ってるようだ。〔因みに、漱石のこの英詩の全訳を評論家・江藤淳氏が試みている。『漱石とその時代・第二部』(新潮社 1970)P.150-158を参照されたい。〕この英詩が書かれたのは、実に1901年8月1日である！異国の地で迷妄の闇を彷徨い、迷い迷った果てに一つの機縁が熟した。かくして‘開悟’に至ったと言えなくもない。そして帰国後に漱石が産み出した数々の小説の作品群、おそらくは未完の『明暗』迄、即ちその生を閉じた1916年12月9日まで一貫している情念と言えはしないか。すなわち、この英詩こそが「漱石文学」のプリンシプル(立脚地)ともいべき何か、つまりそこからすべてが‘自発自転’していったという意味だが・・・。私はそのように思っている。このような‘諦観’、たおやかで潤った心情こそが日本人独特の感性であろう。彼の地の精神分析には決して窺われ得ないもの。‘赦し(forgive)’も‘忘却(forget)’も取り沙汰されることは決してない。盲点かと思われる。

ところが・・・である！なんと、「ドナルド・メルツァー」は、この例外であった。メルツァーは、1990年に『The Centre for Psychoanalytic Psychotherapy in London』に招聘され、講演している。その折のトランスクリプトを『Melanie Klein Trust』のWEBサイトからダウンロードして入手した。これが滅法面白かった。ここに「forgetfulness(忘却)」そして「forgiveness(赦し)」の言葉を目にした時に、私はまさかとわが目を疑った。無論のこと聴衆の反応は微妙で、彼らの戸惑いは隠せない。違和感あり反駁ありといったふうで・・・。とにかく一つ私が愉快を覚えたのは、分析家とはその転移状況において患者を不当にも傷つけるやら、間違いを犯すやら、時にはセッションを忘れるなり、他にもとんでもないことをやらかす場合がなきにしもあらずで、それだから分析患者に‘赦される(赦されてゆく)’といった状況を日々生きている、とメルツァーが指摘している点である。私などは、彼の地で分析家というものは、決して＜Sorry(申し訳ない)＞といったことは言わないもんだなあと内心ほとんど呆れる思いでいた。だから、びっくりした。事実そうした場合でも、普通Sorryは言わずに、こちらの傷ついた感情やら反撥やら恨みごとやらを解釈する。つまりそこにどのような‘意味’があるのかについて終始するのみで、自分がそこにどのように関わっているのかは語ろうとしない。それが彼らの常套手段といったわけで・・・。自分を与えることを知らない、つまり‘not available’なのである。メルツァーが挙げている例に、セッションをすっぽかすといったことがあったが、事実私もこれは一度経験したことだから、内心笑った。確かにそう・・・。そしてこの分析家の過ちを赦してあげられるといった心情が、つまりいつまでもしつこく根に持ち、それで恨みの感情をひきずり、愚痴を言い募るのではなくといったことだが・・・。ここに‘forgetting(忘れること)’、つまり注意がそこから逸れてゆくことの積極的な意味が提言されている。成長へと導かれる機縁の一つとして・・・。すなわち‘心の向き’が変わるというわけ。そして、このforgetting(忘却)がforgiveness(赦し)の重要な側面になる、と彼は言う。これは凄い！この赦し

が、‘過去との訣別’、それも徐々に緩慢な動きなのだが、つまり一步前進二歩後退といったふうに、とにかくにもこれが未来へ向けて一步踏み出すことへのきっかけになろう。‘弾ける (pop out)’、つまりのところ反復強迫的な自己執着といった己の殻が弾けて、そこからの脱却が試みられる。患者はもはや過去に呪縛され追憶にのみ生きている存在ではなく、未来をも生きてゆくべく現在(今)を生きようとする！これが眼目になる！紛れもなくここで彼は実際の臨床家としての己自身の‘経験’を語っている。だから信じていい！ここでフロイトの語るところの「suffering from recollection (回想することの苦悩)」について彼は言及する。おそらく、いわゆる‘転移神経症’といったことに絡んでるのだろう。患者は過去を追憶する、そしてそのワークスルー(徹底操作)が分析の本筋とされる。だが、それで得てして患者の‘生’が閉じられてしまう。それしか患者にはリアルに感じられなくなる。未来が視野に入ってこない。消えてしまう。現在も…。すなわち、現在の中から未来が育まれるといった観点が見失われてゆく。まさにハイデッガー流の‘投企’が盲点。メルツァーが分析患者の一人ひとりの‘未来’に大きな関心・興味を抱いていた点がここで強調される。分析終了後、長らく彼らとの連絡を絶やさなかった理由がそうだろう。私はこれまで、分析家とは分析患者にとって「証しびと」でなくてはならないと提言しているが、過去の振り返りに立ち会うと同時に、‘共に未来を拓く人’でありたいとの願掛けを抱く。すなわち‘贖いびと’たらんとすること。これが<‘贖いの器’への変革>の主旨となろう。

ここで一つ、まざまざと憶い出したことがある！彼の地での教育分析 (personal analysis) の終了間際だったろうか、私の分析家 Doreen Weddell に向かって、私はこう言い放ったのだ。<I shall forgive you, and I shall be forgiven too (私はあなたを赦す、そして私もまた赦されるものと思うことにする・・・)>と！実に空恐ろしい！いかにも驕慢で冷酷非情にも聞こえようが…。私は彼の地で受けた分析体験が大いに飽き足らなかった。そこで私が感じ取った限界とは、つまり彼女は、メルツァーの信奉者であったという事実は事実として、所詮その帰属するところの‘British Psychoanalysisの伝統’の産物以外の何ものでもないということ。だとしたら、致し方ないと思いつけなかったのだ。内心うんざりしていた。<私の‘幼児の部分 (infantile part of myself)’云々はもういい！私の‘大人の部分 (adult part)’こそが問題なのに・・・>と。あの当時、帰国を間近に控えて、私は苛立っていた。どのように日本で生きられるものか、私の未来が、その行く末がとてもリアルには捉え難かった。そこで思った、<私は私で私を‘始める’！>と。これは自分に誓ったこと。もう振り返らなかった。タヴィストックも、Miss. Weddell も…。それから帰国後、数多の歳月を賭けて、ピオン言うところの「recovery from psychoanalysis (分析体験からの回復)」が待たれていたわけだ。それについては、既にメルツァーが他でもしばしば語っているが、改めてこの講演での彼の語らいを通して、ふと、ああ、あれはあれで良かったんだわと一瞬思った。それで、心慰められた。あの時の己の冷酷非情さを今ようやくにして赦されていいと思えたらいい。だが、なかなか正直なところ、そうとも言い切れない。でも、おそらくこれでいいのだろう。そして、憶い出す。彼の地での体験の何が私の裡に残るものか、つまりは摺り入れ同一化の未来に於いての結実、それは時間を経て見てゆけしかない。クライン派としての自意識など邪魔なだけ。そんな構えなど意味はない。だから、ただあちらで教えられたことをなぞるだけのことは忌避されたのだ。ただ一つ思ったのは、「薫習」ということ。その言葉で思い出すが

ある。私が彼の地に行ったのは25歳の頃だが、それから30歳を過ぎた頃に、アレッと気づいたのだ。自分がお母さんそっくりの言葉遣いをしているということ。日本語を日常的に使わない彼の地で、でもいつしか珍しくも日本語を喋る機会があれば、自分の年齢に相応しい、つまり母親そっくりの大人の女性の意識で日本語を語っていた！彼の地でクライン派として貰い受けたものが何かしらあるとしたら、それらは「種子」として私のなかに貯えられてあり、もしも此の日本の地で何らかの因縁に恵まれるならば、それこそそこで生きてゆくであろう。それを信じた。そしてそれから40年余を経たわけで・・・。

そして、ここ最近頃にだが、心励ますような夢を見るようになった。ビオンの言うところの「Recovery from analysis (分析体験からの回復)」にどうやら私も至ったのかと思われた。そうだと嬉しいのだが・・・ここに、それら夢の一つを記す。まさに‘ブレイク・スルー’の夢かと思われた。《夢；何かしらアタフタした雰囲気。自分が何かを‘発見した’らしい。それで‘特許申請’の必要があるということで、慌てているみたいだ。辺りには研究仲間たちが右往左往している。家の中。玄関口辺りにいる。荷物(鍵やらバック)がそこにある。私のらしい。それは後で取りに来ればよいと思っている。そこに、男の子が靴を手渡してくれた。私の靴を探してくれたいらしい。その傍らに別にブーツのようなものがあった。どうやら姉のものらしい。それはそのまま置いて、自分の靴を履いて出る。鍵を閉めて・・・。(しばらく間がある。)目の前の何かを凝視している。プラモデルのような、プラスチック(もしくはガラス)の箱物があり、その窓のようなところが破裂し、一瞬光が弾丸の如く豪快に飛び出す。そのまま、光の束は天に向かって突き進む。まるで航空機ショーを観覧しているみたい。そして、それが天空に弧を描くの眺めている。目の前に起きていることがまるで信じられない。突然何か‘産まれた’瞬間のような・・・どこから？何が？それは判然としないままに・・・。凄い！あちこち見物する人たちの群れ。科学マニアの人みたいで、それはロケット発射を見物しに来たといった人たちみたいだが。或は、むしろたまたま通りがかった人たちなのかもしれないが・・・。喝采の声。パンパカパーン！といった興奮・・・。》この夢の連想は、こんなこと。この頃だったか、「引退の辞」の下書きに取り組んでいて、果たして書けるかどうか大いに危ぶんでいた。ところが案外にもほぼ筋立てがうまく纏まった。快進撃だあ！と興奮していた。これで私は終わってゆけると安堵する。それで早速私のWEBサイトにアップしたいと気持ちが焦ったという次第。そして、この夢になった。全体の印象は、私の‘殻’が弾けたといったことらしい。かつての引っ込み思案で縮こまっていた私、自信のない自分が、どうにか殻を破ったような・・・。そう言えば、しょっちゅう<自信がない>と嘆いていた。でも今や自分を信じていい、そんな想いが生まれた。‘個性’の誕生への賛歌ともいえる。さて、この夢の中の‘靴’のことだが。特に注目される。私が‘姉のブーツ’とは別の‘自分の靴’を履いた。男の子がそれを探してくれて、わざわざ持って来てくれた。これには意味があろう。おそらくこの‘男の子’は画家のヒデさんだろう。引退後の終の棲家をどうするかを相談した折り、<チズが、精神的に解放されていることが何よりも肝腎だ・・・>と彼に言われた。どこか頼りない私がいって、つい姉を頼りにする。だから、<自立しろ・・・>というわけ。背中をドンと押されて、それから物件探しが始まった。で結局のところ、今回の「におの浜」移転の件も、実にいい距離で姉そして妹の家族らと繋がった。頼るにしても頼られるにしても・・・。私は私の生活を始められるし。精神的に解放されている。有難いことに・・・といったことのようなのだ。私の夢が己自身を励ましている。これは、ブラボー！である。

この翌日にも、またこんな夢を見た。《夢；ツル薔薇の枝が、屋根沿いにアーチを描いて這いまつわっている。庭師のような若い男が、梯子の上で薔薇の手入れをしている。手入れがいいからか、薔薇の花が見事。白い綺麗な花びらが咲き誇っている。私とその花に顔を近づける。道端に連れらしい女が二人いて、笑顔で花を愛でている。・・・(場面が変わる。)ちょっと間を置いて、或るお宅の庭先に自分がいる。広々とした庭で大きな藤棚があった。根っこの株は瘤だらけで、その幹から太い枝が四方八方に棚へと伸びていっている。だが、この古木の藤づるは全体に白っぽく、枝の先が黒ずんで、見るからに枯れかかっていた。その哀れな風情が気になった。このまま枯らしてしまうのは忍び難いと思う。そこに初老の男がいた。庭師らしい。どうやら庭で片付けものをしているようだ。彼に托したらどうかと思ふ。うまく剪定し、根っこに肥料を与えるなどしたら、息を吹き返すかもしれないと思う。・・・すると、ふと目の前に‘切り株’のイメージが浮かんだ。それも上手に剪定されており、その瘤だらけの切り株から青々と目の覚めるような緑の‘ひこばえ’が芽吹いているではないか！どうやらこの初老の庭師のお陰らしい。それでふと、昔話の‘花咲か爺’を想起させた。》さて、この夢の連想はこんなこと。世阿弥のことは「心から心へ伝ふる花」というのがあるらしい。これは稀代な能楽師・観世寿夫の遺稿集となった本のタイトルであり、ちょうどこの折に私はこの本を手にしていただけ。＜ああそうなのだ。伝わるんだ、届いたんだ・・・>という思いが胸に迸った。つまりそういうことではなからうか。前半の夢は、どうやら分析患者の一人から彼の書いたエッセイ文のコピーを手渡されたことに関連しているようだ。おおっ、なかなかいい！自分を思う存分語らせている！内心＜お手柄ね！>と呟いた。このようにして、精神分析の未来において私自身が誰かと繋がってゆく。それが確かなものに思え、大いに慰められた。そうした私の‘楽観’がここで語られている。それから後半の夢だが、まず‘初老の庭師’が誰だったのか。すぐさま太田久紀先生が連想された。さらには、メルツァーなのかも知れないとも思った。実際のところ彼は園芸が趣味だし、これまでも時折私の夢の中に‘庭師(gardner)’として現れることがあったわけだから。でもここでは、おそらく庭師というより、むしろ‘樹木医’ではないか。すなわち、腐蝕が進み、枯れかけた巨木を蘇生させるといったこと。精神分析の未来が危殆に瀕しているといった私の焦慮がここに窺われる。ここでこのお二方を或意味‘助っ人’にするには理由がある。どちらもその生涯をとおして、「無明」というものに深く関わってきた。メルツァーについて言えば、その最晩年の著作『The Claustrium(閉所)』が殊更そうだ。他の追隨を許さない。心の「無明」なるものがかつて精神分析に於いてさほど克明に白日の下に晒されたことがあるだろうか。その冷徹なまなざしには圧倒される。そして、そこからの‘脱却’とは何かが問われてゆく。これこそがまた「唯識仏教」でもあるわけで・・・。振り返れば、私は彼の地の精神分析にずうっと飽き足りないものを覚えてきた。確かにスタート地点はいいのだが、ゴール地点については今ひとつ要領を得ない。すなわち、そもそも精神分析とは一体何を志向するものなのか。すなわち、その‘終わり’とは何かということ。もしもそれで‘人間嫌いになってしまう’など、断固あってはなるまい。人間性の涵養に於いて‘明るき心’を問う視座が求められよう。彼らに‘助っ人’として何かを托さんとする所以はそれなのだ。さてさて、精神分析が果たして「唯識仏教」に繋がるものやら。うまく‘接木’されるといいのだが、と祈るような気持ちでいるといった按配だ。とにもかくにも己自身の心が何やら些かなりともすっきりしてゆくようなのがわかる！‘楽観’が私の裡で育ってゆくような・・・。それだけでいい！斯くして私の内側で‘東’と‘西’とが出逢ってゆく！

ここで面白い話を一つお聞かせしよう。女性の分析患者で、妊娠している期間、つまり胎児ともども十ヵ月近く分析セッションにお通いだった方々がいる。それら幾人かからその後のお子さん方の育ちについて報告されることがあり、驚いた。それぞれの子どもが語る‘言葉’が実に弾けているのだ。あけっぴろげで、機智に溢れ、滅法面白い。それで、なにやら妙な‘妄想’が湧いた。まさか・・・と思ったが、またもしかして・・・と。彼らは母親の分析セッションの中で私の‘声’を聴いていたのかも知れないということ。その母親の胎内において・・・無論、誕生後にそれぞれが日常的にその母親からそして父親からもどれほど呼びかけられて育っていったのか、想像に難くないわけだし・・・だから言語的センスがあるということは、その成長の当然の証とも考えられる。よく育てたわねえと、ブラボーじゃないの、と内心思う。私に関係しているなど思いも寄らない。けれども時折、それら母親の分析セッション中、なにやら微妙な感じはあったのは事実だけ・・・。普段は一人一人なのに、もう一人いるといったふうに・・・。滅多にないことで。当時は全然意識していなかったのに・・・。だが、まったくの妄想でもなさそうな気がしてきた。私特有の嬉しがりやの一人合点かもしれないけれども・・・。それでふと、男性患者の場合ならば、どういうことになるのかしらと思い、或る男性の分析患者にセッションの中で尋ねてみた。彼には生後11ヶ月目の赤ちゃんの息子マータンがいる。彼曰く、<それはそうだろう。ここに通ってなければ、決して言わないようなことを自分はわが息子に日々語っているんだから・・・>と。つまり間接的に私の‘ことば’が彼を通してその子どもに間違いなく届いているということ、彼は私に請け合ったというわけ。妻の妊娠中も出産後も・・・！胎内にいるときから、頻りに親たちから呼びかけられて育った子どもではあった。将来この子がどんな言葉を語る子どもになるやら、とても楽しみだ。断乳の辛い時期に、ママのオッパイを恋しがって頻りに泣き喚くマータンに、父親の彼がやさしく慰めの言葉を語り聞かせる。<パパはね、君の成長をとても誇らしく思ってるんだよ>って・・・。すると、自分の泣き喚く声しか耳に入らないようだったその子がふと父親の声の方に耳を(つまり意識を)向けた。聞いているのだ！父親の声が届いた瞬間だ。そして近頃では、言葉はまだ出なくても、<ウンウンウン(あのね、あのね)・・・>としきりに身振り手振りでなにやら語り始めてる。誰かに聞いてもらえることが嬉しい。理解されることの自信。そこから言葉が弾けてゆく。それが発語を促すとはマーサ・ハリスの持論でもある！私は彼らが可愛くてならない。サトル君、アマネちゃん、そしてハルト・ヨシトの双子ちゃんたち、それから赤ちゃんのマータン、そしてヒカルちゃん・・・。実は他に幾人もいる。元患者の皆さん方から送られる年一回の年賀状の家族写真でしか会わない子どもたちなのだが。ふと気づくと、なんとまあ、《我が心の内なるファミリー(my inner family)》はとても賑やかで、しかもなんととも健やかなのである。かくして、ここに至って私が自らの内に生涯希求し続ける‘親なるもの’があながち不毛(infertile)でもなさそうに思われた。何やらしみじみ深い安堵を覚える。私は、心理臨床において、ことばを孕むこと、つまり‘心の育ち’の機縁としての言葉をどれだけ孕むことが出来るのかをモットーとした。ことばとはいのちであり、いのちとはことばなのだということ。それを信じられる限り、分析家であることの妙味は尽きない。

ところで、私が<‘手力男命(タヂカラオノミコト)’を信心している>などと言えば、冗談かとお笑いになるかしら？例の「天岩戸」の神話。天照大御神が天の岩戸にお隠れになり、この世が漆黒の闇となったとき、その無双の怪力で岩戸をこじ開け、それでこの世に光が蘇ったとかいう、その神さま！私

は昔からなぜか「面」に興味があった。能舞台でシテ方が着ける能面もだが、どちらかという村落の祭りに奉納されるような民俗面に魅せられる。或時、銀座の『ギャラリー飛鳥』で展示されていた手力男命の面を目にした折に、痛く惚れ込んだのがきっかけ。それから後日、たまたまつアアで信州の戸隠神社を訪れ、奥社参道の杉並木をケータイのカメラであちこち撮影していた折、光の波動がなにやらとても微妙で、我が身にひたひたと迫る‘靈氣’を感じたから不思議だった。そこで樹齢約400年なる杉の巨木と私の影が合体した、まるで心靈写真みたいな、とんでもなく奇妙奇天烈なセルフポートレートが撮れた。それらを『フォト・ギャラリー』にアップしてあるので、既にご覧いただいている方もおいででしょう。これは後で知ったことなのだが、戸隠神社に主祭神として祀られているのは、なんと‘天手力雄命(アメノタチカラオノミコト)’なんだとか。その神さまから‘合図(パワー)’をもらったかのようで嬉しかった。ちょっと畏れ多いし、まさか?! なんだけど…。神頼みなど普段しない私であるし、それに、やはり私はどちらかという、生きて人間がいい。〈開け!〉の契機になってくれるような‘誰か’に出会いたい。そんなことがどう問題なのかといえ、つまりは‘縁起力’なのだ。実は、手力男命の面の写真を額に入れて書齋に飾ってあるのだが、自分の中の鬱々とした閉塞感が晴れる。実にそうなのだ。そこから〈明るくなくてはダメよ〉という母の声やら〈精神的に解放されていることが肝腎だよ…〉という画家のヒデさんの声が聞えてくる。さらには、『朝日カルチャーセンター(新宿)』で邂逅した、講師陣たちの顔触れも浮かんでくる。取り分けて、御三人の‘智者’の面々! 畏敬の念を覚えた、あの懐かしい方々。講座「旧約聖書のかんどころ」の高木幹太牧師、講座「芸術と宗教」の植田重雄先生、そして講座「アリストテレスを読む」の加藤信朗先生。それから他にもう一人、忘れ難いのは俳優・沼田曜一である。私は、或る時期、沼田先生の主宰する「語り塾」で塾生の一人として「民話の語り」のお稽古に励んでもいたわけで…。そうした方々は、その折々に、私にとって実に「手力男命」なのだ! 愚昧で臆病な私の背中をグイグイ押してくれた。私を啓いてくれた! 多くの機縁をいただいたことになる。敢えて申せば、そうした機縁の列なりで‘今の私’があるといえる。精神分析は「イナイナイバー」なんだと常日頃分析患者に言うことがあるのだが、「イナイナイ」がどうしたら「バー」になるものやら…。手力男命の‘念力’が求められる所以なのである。言<sup>こと</sup>霊<sup>だま</sup>的な何か。心揺さぶる、響く何かがあるということ。ここに世阿弥いうところの「花」、すなわち‘面白や’とか‘珍しや’といったことが問われよう。それがあつかないか。惟うに、西洋的なロゴスの探求、そこではギリシャ語でいう「ミュートス」つまり「筋」が肝腎要となるわけだが、勿論言葉が筋立てされ、どこまでも分け入ってゆく。そして言葉がどこまでも増殖する。かくして自分がまとまってゆく。カントの構想力といったことになるだろうが、それも大事。だが、そうしたロゴスとも違う、なにか別の感触が求められる。すなわち、分析セッションで語られることばに‘手触り’を感じる、‘心<sup>こころ</sup>榮え’を感じるといったこと。かくして精神分析に於ける「語りの復権」ということを、私は常々考えてきた。漱石が‘謡好き’だということを知ったのはつい最近なのだが。熊本で英語教師をしていた頃に謡を習い始め、英国留学を経て、帰国後しばらくしてだが、下掛宝生流のワキ方宝生新の出稽古で謡を再開している。ほう、なるほどと感銘を覚えた。西欧帰りの明治人、その彼の中の‘ないものねだり’に私は大いに共鳴する。ロジカルであることだけではどうにも窮屈なのだ。『草枕』の中の〈意地を通せば窮屈だ…〉の科白のように…。やはり情趣が求められよう。



分析家としての私はここで終わるわけだが、近頃『日本の精神分析の未来を考える会』というのが発足したと耳にして、あら、まあ・と嬉しかった。実にこの40年余、私は単独で『日本の精神分析の未来を考える会』をやってきたんじゃないかふと思った。お仲間がいるっていいわね、と彼らが羨ましい。遅ればせながらも、その一人として、ここでちょっとお仲間に加わるつもりで、この文章を書いてみた。ともかくにも「精神分析の未来」とは‘己自身の未来’なのだ。つまり徹頭徹尾＜自分に根ざした精神分析を生きてみよ＞ということ、そして可能な限り＜まずは自分に語らせてみたらどうだろうか＞と提言しているわけである。それで、もしかしたら、ここに＜私は斯くのごとく生きた＞と書き綴った、私の‘過去’がいつしか誰かの‘未来’になるやも知れない。そんなことをもちよと夢想した。つながってゆく！！それでこそ、私が私で良かったんだという思いにもなれる。このようにしてバトンは手渡されてゆく。私が去っても誰も困らないだろうという自信はある。折々に手渡せるものは手渡してきたのだから、さらなる‘探しもの’に気づくとしたら、それぞれがそれぞれなりに探してゆくであります。

最後に、ここで故小此木啓吾先生について触れたい。ぜひともこの文章をお読みいただきたかった。帰国当時は私が此の国で根付いてゆくことに随分とご尽力いただいたのに、いつしか疎遠になってしまった。私のことを「原宿仙人」などと噂しているとは承知していたが、それが或る日、だいぶ音沙汰なしが続いた頃、慶応系のどなたからか、小此木先生が＜山上先生は、‘善光寺’だから・・＞と言っていましたよというのが耳に入った。あら、まあ、どうということなんだろうと思ったけど、かつてどこかで私については「右顧左眄せず・・」といったことを語っておいでで、おそらくそうしたことも思ったが、さして気にも留めずに聞き流していた。それが今更ながらだが、ふと気になって、善光寺についてネット検索してみた。つまり私がなんで‘善光寺’なのかということだが・・。あら、まあ、だった。なにやら善光寺のご本尊は‘絶対秘仏’であり、決して人前にお出ましにはならないのだそうな・・。あらら、なんだ、これか？！ようやく謎が解けた。山上先生は奥にお隠れになって全然お出ましにならないなあってことを諧謔的に彼は言われのだと悟った。申し訳なくて、身の縮むような思いだ。それが今やこんなふうに出てきてしまったわけで・・！斯くてここに己の生き様が開示された。正直なところ、内心とても羞じ入ってしまう。

末尾ながら、これ迄私を「山上千鶴子先生」にして下さった分析患者の皆さま方に心からお礼を申し上げたい。ほんとうにありがとうございました！引退後はただの「山上千鶴子」で生きてまいります。『日本精神分析学会』も近々退会の手続きを取りましょう。このWEBサイト《山上千鶴子のホームページ》もいつか折を見て閉じることになりましょう。小此木先生のおっしゃる‘善光寺’ではないけれども、せつかく山上先生は出てきたと思ったら、またまた引っ込んでしまうというわけです。皆さま方との繋がりを求めて、私からの呼びかけがいつか誰かに届けばいいなあと思いながら、でも内心ほんとに届くかしらと大いに逡巡しつつ、こうして呼びかけ続けてまいりました。その呼びかけの一念で始めたことです。その役目は果たされたといえるでしょうし、いずれ消えてもいいかと思っておりますわけで。お付き合いいただきましてこと、皆々さまに謹んで深く感謝申し上げます。誠にどうもありがとうございました。

合掌

[2021/01/01 記]